

## 1 中国の風流と好色

今日「風流」というと、独り月を見ながら歌を詠んだり、枯れた老人が盆栽をいじったりというイメージがある。けれども歴史をさかのぼるといささか様子が違う。というか、まったく違う。

本章では『万葉集』の「風流」の用例を調べて、この言葉に古代の日本人がどのような意味を託していたのかを調べる。とはいえ、いささかの事前準備が必要である。まず、中国の古典で「風流」の語がどういう意味で使われていたのかを押さえなくてはならない。

中国語の「風流」はもと君子の徳風が後世に流れて伝わることだったようだが、時代とともにその意味も変わってくる。岡崎義恵は中国古代の用例を調べて言う。「その根本的意義は優れた精神文化的価値の存する有様といふことである。その内容は初めは主として政教的であつたかと思はれるが、更に広く倫理的・美的価値の領域に及び、その所在は天下の民俗・特定の個人・自然物・芸術品等に互つてゐる」(『日本芸術思潮』)。なんだか広すぎて漠然としているが、要ははじめ国民の道徳教化の話であつたものが、やがて個人の品格にも、自然の風景の美しさにも、優れた詩文や音楽にも用いられたということである。注目すべきは、六朝末期(六世紀)の詩集『玉台新詠』になると「優婉の美」および「感覚的魅力と性的・情的蠱惑力こやくとを含んでいる場合がある」(同)という指摘である。平たく言えばセクシーということである。

古代日本(飛鳥〜平安期まで)の文化に最も影響を与えたのは六朝(三〜六世紀)と唐(七〜九

世紀)の文化である。唐代の「風流」の意味については小西甚一の綿密な調査がある。清の康熙帝は唐代の詩を全て集めよと命じ、一七〇三年におよそ五万の詩を収めた『全唐詩』九百巻が出た。小西はその『全唐詩』から「風流」の含まれる全ての語句を抜き出して調べたのである。そしてこう結論した。

『風流』はおもに『琴』『詩』『酒』『妓』およびそれらと共通な意味の語に結びついていることがわかった。したがって『風流』とは、音楽をめで、詩文をたしなみ、酒興を愛し、女性との交遊をたしなむという生活から昇華された理想的典型だったと考えられよう。

#### 『中世の文藝』

まるで枯れてなんかいらない。むしろ生臭い。その理由は、小西によれば、唐の少し前の六朝期に老荘思想がはやったこと、とりわけ六朝後期に神仙道が隆盛したことにある。「精力絶倫の仙人と容色美麗な仙女との交情は、道教における重要な理想像」で、「仙女と共に音楽・詩文・酒宴などを最高の水準において愉しむのが仙界の生活」とされ、これを模倣することが「風流」とみなされたというのだ(「風流と『みやび』—琴・詩・酒・妓の世界—」。なお小西によれば、ここで言う「酒」とは飲酒というより酒席のことで「その席でかわされる機知的な社交談義をも含め、宴席の全体を酒で代表させた」ものであり、「妓」とは「女性の美しさを妓で代表させたにすぎず、実際

には、若く美しい女性との交遊ないし交情を愉しむこと」であるという。

このような詩に出てくる中国の妓女は官妓、つまり一種の公務員だった。唐代なら長安の北里、明代なら南京の旧院に妓楼が集まる地域があり、個々の妓楼は吉原のように民営化されていたが、その妓女たちは教坊（歌舞音曲担当の役所）に籍を置き、宮廷内の歌舞に参加した。だから妓女たちはみな音楽の訓練がされていた。しかも知識人である政府高官のひいきを得るには文学的教養が必要だった。もちろん詩も作った。『全唐詩』には妓女の詩一三六首が収められている。だから『琴』『詩』『酒』『妓』に結びつく「風流」の詩の多くは妓楼で生まれたと思われる。

じっさい中国の高級官僚たちは官庁での政務が終わると、夜は妓楼で遊ぶことが多かったようだ。たとえば科挙の結果が発表されると先輩の官人たちは合格者を連れて妓楼にゆき、新しい仲間のための祝宴を開くのが慣例だったという。こんな洗礼を受ければ新人たちもその生活スタイルを真似るようになるだろう。つまり中国最高の知識人集団である都の高級官僚たちは、昼はその能力を政務に発揮して国家を正しく運営し、夜は妓楼の酒宴で妓女とともに音楽を奏したり詩文を作ったりしたのである。このような生活を「儒雅風流」とか「風流儒雅」と言った。小西によれば、儒教の求める品格の正しき（儒雅）と道教の推奨する風流とは対立するものであるけれども、これを公務と私生活とで使い分けるのが「儒雅風流」という生活スタイルなのである。そしてこれは知識人の理想となる。

たとえば杜甫の詩『詠懷其二』の中に次の句がある。

揺落して深く知る宋玉の悲しみ  
風流儒雅またわが師なり

宋玉は紀元前三世紀の文人。「揺落」の語は宋玉の『九弁』という詩の中に「秋は悲しい。風が吹くと草も木も揺れ落ちて、姿も変わり衰えてゆく」とあるのから来ている。杜甫は「宋玉が秋を悲しむ気持ちはよくわかる、彼の風流儒雅は私の手本だ」と言っているのである。では宋玉とはどんな人物だったのか。古典の中の宋玉を見てみよう。

現代中国でも宋玉は「古代四大美男」の一人とされ人気は高い。ちなみに「四大美男」の他の三人は潘安はんあん（潘岳）、蘭陵王、衛玠えいかいである。共通するのは知性と容貌がともに優れていること、そして文学や音楽の教養が高いこと（才貌双全、文学音楽修養極高）であるという。宋玉は日本でも『高唐賦』や『登徒子好色賦』の作者として知られていた。『高唐賦』で有名なのは序文の冒頭などで、その概要を次に紹介しよう。なお「高唐」は山東省の地名である。

楚じょの襄王じょうおうと宋玉とが高唐の高台に登ると、にわかには雲が立ち上がってつきつきと形を変えた。王が「これは何か」と聞くと、宋玉は「朝雲」というものですと答えて、こう説明した。昔、先王が高唐で昼寝をしていたとき、夢にひとりの女が現れ、枕をともしたいと申し出た。

王はそれを受け入れた。女は去り際にこう言った。「私は巫山に住んでいますが、朝には雲となり、暮れには雨となり、朝な夕なに巫山の丘に現れましよう」と。翌朝空をみるとその通りだった。そこで王は彼女が神女であったことを知り、廟を建てて「朝雲」と名付けた。

仙女との交わりが神仙の風流な生活とされたとき、この逸話はその先例として理想化される。後にこの『高唐賦』を典故として「巫山雲雨」という成句が生まれ、男女の情交を美化して言うための表現となった。漢詩文中にあまりによく出てくるために、単に「雲雨」と言っても何のことか通じるくらいになった。当然ながら宋玉の名前はこの『高唐賦』と結びついている。しかも彼は美男子であったというから、ここに宋玉は在原業平なりひらのような色好みではないかという期待も出てくる。しかし宋玉は『登徒子好色賦』で自分は好色でないと弁明している。

ある日登徒子が楚王に言った。「宋玉は容姿端麗、言葉も巧み、そのうえ好色です。王の後宮に出入りさせないほうがよろしいでしょう」と。王が宋玉に「登徒子の言い分をどう思う」ときくと、「容姿端麗なのは天から授かったもの。言葉が巧みなのは師から学んだもの。しかし好色という性質は持ち合わせておりません」と答えた。王が「好色でないと説明できるか？ できなければ出入禁止にするぞ」と言うと、宋玉はこう答えた。

「美人といえれば天下で楚国が第一、楚国の中では私の郷里が第一、私の郷里でもっとも美しい

のは私の東隣に住む娘です。非のうちどころのない完璧さで、彼女の微笑に心乱れない男はありません。この娘が三年も垣根の間から私のことを覗いていたのですが、私はずっと無視しました。けれども登徒子は違います。彼の妻は、頭はぼさぼさ齒はぼろぼろ、背中は曲がり、皮膚には疥癬かいせん、おまけに痔までありますが、登徒子は彼女が好きで五人も子どもをもうけております。いったい好色なのはどちらか、お察しただけでしよう」

もちろんこの逸話は事実かどうかわからない。けれどもこれはひどく面白いので、日本でもよく知られていた。宋玉には他にも著作があるのだが、日本での宋玉像はもっぱら『高唐賦』と『登徒子好色賦』から作られた。つまり杜甫のいう「風流儒雅」のうち「風流」の面ばかりが有名になった。そして『万葉集』における「風流」の用例は、容姿と文才にすぐれ、機知に富む社交を行う宮廷人というこの宋玉のイメージに近い。

## 2 『万葉集』の「風流」

『万葉集』の中に出てくる「風流」の用例を検討する場合、まず二種類の「風流」を区別しなければならぬ。一つは中国語としての「風流」。もう一つはなんらかの日本語の表記として「風流」を使っている場合である。この日本語は現在「みやび」であろうとされている。つまり漢文の中に